

統

日蓮門下七教團 統合大講習會 講演集

定價金壹圓五拾錢
本文約一千頁以上
講習會參列者寫真入り
送料(内地) 十二錢
(朝鮮、滿洲、臺灣) 四十錢

日本國體の根本義を説明せるは法華經にして之を活釋し發揮したるは大聖日蓮の外には一人もあらざる也大聖日蓮は宇宙及人生に起る一切の問題を解決すべき使命を帯び特に大日本帝國を撰んで人間として生れし也大聖日蓮の活生存在は大に日本歴史の眞價を高むる所以なるを知らざる可らず日本國民にして之を知らざれば歴史を解せざるものと謂ふべし大聖日蓮觀りに委を釋してより將に七百年其の宗教的思想の系統を繼承せる日蓮門下各教團は今現に事實に分裂を去つて統合の新記録成らんとす先づ第一事業として東京に大講習會を開けり本書は各教團の思想に對して徹底的理解を要す未だ大聖日蓮の大人格大思想に接するの幸榮を擲けざるものは何事かを差し措いても奮て本書を讀まざる可らず

内容

教團融合論、國柱會總裁田中智學君。教表の統合に就て、僧正井村日成師。統合に關する意見、大僧正本多日生師。五義三法、國柱會總裁山川智應君。統合近世史實、權大僧正藤田亮淳師。時局と統合、高島平三郎君。基督教徒の統合運動、マスタナーガアーツ柴田一龍師。國家と宗教、法學博士山田三真君。日蓮主義より觀たる神學及科學、文學士小林一郎君。現代と道德、文學士吉田靜致君。國民道德に就て、文學士深作安文君。日本國民の自覺、海軍少將佐藤藤太郎君。世界政策小史、文學博士箕作元八君。日本佛教史、境野黃洋君。儒教と佛教、文學博士井上哲治郎君。惟神道に就て、法學博士寛克彦君。觀心本尊抄解題、清水梁山師。本尊の統一、僧正嶋村日正師。如說修行抄義、菩薩主義、僧正野口日主師。日蓮本佛論、大僧正阿都日正師。本化行學の指針、權僧正松森靈運師。善意品大觀、權僧正關田日城師。

發行所

東京芝區二本榎町一ノ一八

販賣所

東京小石川白山前町十七

統 合 事 務 所

三 上 義 徹
振替東京二八八四〇番

▲發行期日 目下印刷校正中。九月五日發行

(東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舎印行)

信仰と開化

大僧正 旭 日苗

法華の大道を諦達せよ

記者

時局と國民の覺悟

文學博士 白鳥 庫吉

道德と信仰の契合

三上 義 徹

△謹んで讀者諸賢に告ぐ▽

このたび、本誌の經營上特種の支障相起り候ため、目下考慮中に有之、従て本月號は編輯整はざるのみか、内容其意に任せざる點あるは甚だ遺憾に堪へざる所、何れ考慮相決し候上、更に一段の勇猛精進を以て従事致すべく候間、爲道、何分の御加勢被成下候様希上候右様の次第に候へば、購讀料金未拂の諸賢は、是非本月中に(振替にて)御拂込方相願上度候恐々

△送金は(東京小石川白山前町十七番三上義徹)へ拂込む事▽
(振替口座東京京貳八八四〇番)

爾の小見
を捨て、

法華の人間道を

諦達
せよ

(1)
日蓮上人の肉身は、貞應元年二月十六日安房の國小湊の地に生る、生涯六十一年、弘安五年十月十三日武藏池上の郷池上宗仲の邸に入波せらる、然り、日本國籍の上に日蓮上人の肉身の死したるは事實なり、然れども日蓮上人の人格及思想は死せず、今現に人文發展の爲に活躍しつゝある也、思ふに日蓮上人の生るゝや、久遠本地の神祕の約束あり、されば生るゝ時始めて生れしにあらず、死せし時始めて死せしにあらずる也、凡俗の眼には死生の別あるが如く見ゆるれども、實は不生不滅にてあるを知らざる可らず、本地の約束に基いて文明道を建設し人間道を展開せんが爲の出現也、其使命や重く生の意義や深し、日蓮上人が歳三十二、人間道の開拓事業を宣してより、歳五十三、佐渡の鎭居より歸らるゝに至る二十有餘年間、常に壓迫的危機の運命に在りしも、日蓮上人の前には總ての悲痛も物の數ならず、忍び難き慘愴悲痛の實生活も何等關する所にあらず、生は生ならず死は死ならざるが故に、迫り來る死の前に立つて本化の信念を斷行し得て、更に一段の餘裕を存し、常に永遠不滅の不死に住せし也

不死の法則、之を疑は、人間を理解せざるもの也、固より其顯はれに於て有限的死の事實を認むべしと雖、人間自體は無限の生命を有す、死の關門を通過して肉身現在の運動は熄むも生命には變化あるを見ず、死は生命の外形にして幻影なり、無限に生きんとする人間は、刻々に變化して常に其生活を新にして進まざる可らず、即ち刻々に死亡すると共に刻々に新しく生きて行かんとするもの也、人間道とは不死の理を自覺して死を恐れず、無限發展のために奮闘的生活を續行する力を云ふ也、若し夫れ死を恐るゝが如きは、それこそ眞の死亡なりと謂はざる可らず、人間は有限界の中より脱け出て、無限の生を開拓して行く處に、不死發展の獨立人格を見出し得る也、死とは是絶滅空の意にあらず、從て縁起惡しとて嫌ふべきものにもあらず、人間として永遠に進み行く一關門なり、人心の偽らざる欲求に應ずる自覺を喚び起す力也、死は恐るるに足らず、漫りに死を恐るゝ觀念のみ強ければ、人生に於ける一切積極的活動は停止せらるゝに至る、恐死病者は刹那的肉的欲求の満足に囚はるゝものにして、人間道に徹底せざる小人根性也、小人は暗迷的生活にありて一點の光明に接せず、所謂一寸先は闇の生活なり、斯の如きは人間の墮落なり死亡なり、法華の人間道は之れを救ひ光明を與ふる也、日蓮上人の一代に於ける猛烈なる運動はこの根本救濟の事業なり、

各個性に人間道に來るべき自覺を與ふる也、人間にして人間道に徹底せざれば人間の資格喪失にして即ち死亡なり、死を恐れながら自ら死亡するが如きは甚だ愚なる仕業にあらずや

人間には無限の力あり、この力を縦横に開展して自己及全社會の爲に盡せよ、是即ち人間道の色讀なり、宗教の眞目的は、この自他共存の發展に在り、從て他の個性格をも無限に發展せしめよ、之れ即ち人間道の極致也、斯の如き自他俱安の思想が、各人の間に結び付けられ實行せられて、一國の風教は權威を有し文明道は發揮せらるゝ也、法華經は文明道の原理を明かにして大人君子の道を示したる教にてある也、徒に衣食の爲に節義を枉ぐるは小人道にして空虚の生活なり、須らく法華經の文明道に則りて思想生活を營み且つ之を強めなば、人間自體の本面目を發現し得るは確實の理也、人は死すべきものにあらず、無始より無終に至るまで生命は活動して死せざる也、日蓮上人はこの眞理を徹底せしめんがために非人間道主義者と戦ひたる也、而して人間の生活は、萬事を綜合したる法華唯一の信に在り、信とは古聖之を釋して善の源徳の母なりと言へり、善及び徳の美的境涯は、向上の生活にして無限の進行なれば即ち不死の生活也、宗教に於て強烈なる信を勸むるは、人自身の個性と國家の體相を莊儼せんが爲也、之れ法華文明道の本義にして究竟の目的なり、故に信強ければ偉大なる神祕

の力之に加はる、天地感應の不可思議力、人間内在の活精神と一如せば何事なりとも遂行し得ざることやあるべき、目の前の成否は論ずるに足らず、人間道の色讀は永遠の發展なり、文明の權威は國家萬年の大計なり、日蓮上人はこの大道に由らずんば人も國も衰亡の運命に陥るべきを力説せらる、果せるかな鎌倉當年、他國侵逼難の豫言は弘安四年の蒙古襲來となり、而して大義名分を謬れる賊子出て、國內の秩序を紊したる自界叛逆の難は起れり、一切の豫言斷案は悉く的中せり、斯かる現象はたゞに鎌倉時代の昔の事にはあらず、大正の現代に於て目前に逼れる問題にあらずや、いまや世は益々澆季となり、人はみな永遠不死の觀念消え失せて一時の苟安を貪り、徒らに形式皮相に囚はれて偏狹なる自由平等の毒想に酔ひ、人間生存の大本將に倒れんとするの危殆に瀕しつゝあるにあらずや

世の人よ、そのあらゆる妄想邪見を打ち捨て、法華の人間道に進み來らずんば、何人にも不死の生活に入ることを得ず、不死の本地に達せざれば死生の意義を知ることはざる也

先づ萬事を抛つて法華の人間道に由りて爾自身を理解せよ、法華の文明道に由りて千百の思想を包容歸結し國運發展の基礎を確立せよ、潔よく其の小見を去つて法華の大道を鑽仰し信解せよ、更に言ふ正直に信解せよ (三上生記)

信仰と開化

(米國博覽會に開盤せられたる萬國佛教徒大會に出席せられたる旭大僧正が、歸朝後、九月廿七日淺草本覺寺に於ける説教の大意也、本題は記者の附けたるもの也)

大僧正 旭 日 苗

扱、皆様方信心と申しますのは、御寺へ御参りする許りでない、親子の仲の睦しいのも、夫婦の中に争ひのないのも、兄弟仲よく暮すのも、それが皆信心にならなければ相成らぬ、佛教で信心難有いと云ふ誠心、この心がなくては人は無下に卑しくなる

今日日本の有様はどうぢや、新聞を見ましても雑誌を讀みましても、毎日〳〵人を殺したり詐欺を働いたり親子兄弟が争つたり、虚偽を言つて人に迷惑を掛ける人が多い、そこでこの悪い事が日本の内輪許りに知れると思ふが、さてさうでない、今日の日本の新聞の記事は三日経ては亞米利加の新聞に出る、日本の何町

の何某が何をしたと云ふ事が出る、間違なくその通り載せる、之が新聞に出ますので、日本には佛教がありながら斯う人殺しが多いのは何事だと言はれるけれども、實際であるから何と申し開きの仕様もない、残念なことぢやが致し方がありません

そこで私の御一統へ話さうと思ふのは、佳肴ありと雖も食はざれば其味を知らずと、近松門左衛門が忠臣蔵の淨瑠璃の始めに書いてある、十二段の淨瑠璃は如何にもよく出来て居る、之を淨瑠璃語りか或は雲右衛門の様な良い聲で語れば、ホツとするほどの妙味があります、此の語ばの意は、甘いものが目の前に

澤山あつても、口の中へ入れなければ甘い事が分らぬ、彼の風月の練羊羹でも食はざれば甘い事を知ることが出来ません、それと同じく、世の中が開けたと申しても、實地に就て見なければ其真相は分りません、そこで私は、文明開化と云ふ馳走を食べて見ようと思ひました、先頃亞米利加へ参りました、世の中の人は、亞米利加と日本との文明開化の程度に就て、日本は遠く之に及ばず三文の價値もない様に、外國の人許りを偉い者と思ふて居るが、私は八十三歳で亞米利加の献立を見に参りました、一體開化とはどう云ふ事でありましよう、開化とは開け化けると云ふのぢや、化ける、上手に化けるのぢや、一寸一例を申しますが、亞米利加の博覽會に、福井の生れて京都で踊の誓古をして居る六十歳の婆さんが地洋丸に乗つて行きました、船中は退屈でありますから種々の餘興がある、一藝あるものは皆演ります、處が六十三の婆さんが立派な娘に化けて都踊をしました、それから愈々亞米利加へ着いて、博覽會の演藝の舞臺に幕を張りて都踊を演りました

が、六十三歳の婆さんが若々しい二十三歳の女になつて、中々上手に踊りました、巧く化けました、そこで開化とは化けることぢや、化けるのは狐や狸許りではない、亞米利加はよう上手に化けて居りますことぢや、先づ町の道路の綺麗なこと、東京の町の様に塵芥を堆めてはない、風が吹いても不潔なものは飛ぶ様なことは無い、道路が全然セメントで固めてある、町中セメントで化けて居る、電車自働車が走つても塵芥が立たぬ、日が暮れると町の道は水で洗つて一層綺麗になる、道はテカテカ光つて能く化けて居る、日本は御所の前でもさうしたいと思ふがどうもならぬ、若し亞米利加の人が日本へ参つたら、何せ斯う道路が穢ないだらうかとおもふてありましよう、斯う云ふ點は餘程彼國の方がよく化けて居る、それならば國の文明はどうだ、我が日本の聖天子は皇統連綿に御在しまし、慈愛を以て國民を統治遊ばし給ふ神聖尊嚴の御位に御座ります、建國の當初より天皇と臣下との分が定まつて居ります、之が日本文明の根本である、然るに亞米

利加の大統領は四年目に變る、候補者が競争して人民に選舉される、そして人民が自由など言つて威張り散すのである、兎に角開化と云ふ化け方は如何にも上手である、而して文明と云ふ段になると遠く日本には及びませぬ、日本の文明は誠に難有い、是は小學より大學までの學校で、能く文明を教へて貰ひたい、それから日蓮宗の方々に就て申さば、御題目を唱へて信心をするのは、人間が佛様に化けることぢや、悪い根性を捨ち伏せて佛様の様な立派な精神になるのぢや、人の心には曇りがある、曇りを取り拂つて晴々した心になるのには信心が大事である、煩惱業苦の三道を轉じて法身般若解脱の三徳に化ける様に修行せねばなりません、教化の化は化けると云ふ字を書くのである、煩惱充滿の人間の身は情けない事ぢやから、穢れのない立派な佛様の様にするのが、御釋迦様の御慈悲であります、之を正法と云ふのぢや、この正法を建立して邪法を退治し、天下國家を泰平に致さんと御働き遊ばされたのが日蓮大上人、大上人は立正安國の精神を

以て日本の文明を發揚せられたのぢや、上人御入滅の折にも、日朗始め弟子檀那方に御遺誠なされて居る、されば大上人の信心を致すものは、よくこの心を奉體して譲りのない様に勵まねばなりません

二十八日は宗旨御建立の記念日であるから、清澄山の靈蹟へ參詣致して、日苗が亞米利加へ参つて、少々なりとも弘通の御手傳致した事を申上げます爲に明二十八日房州へ出立致します、何はさて人の壽命は無常ぢや、貴賤貧富の隔てない、御一統は身體を大事に信心堅固に、家の爲め國の爲め、よく立派に開けて化けて行く様に盡さにやなりません、又十一月には天皇様の難有い御大典があります、充分氣を付けて御國の榮えます様に、日本國の人は残らず、この念願を持つことが大事であります、何事にも信仰の心得に背かぬ様に努めますことが肝要、ゆめ之を忘れては相成りません

願はくば、三寶諸天感應道交あらしめ給へ

時局と國民の覺悟

文學博士 白鳥庫吉

自分は大學に於て歴史殊に東洋の方の歴史を擔任し終日圖書堆裡に没頭して史料の研鑽に耽つて居る所の所謂學究的の一人である、古文書とか史跡とか往古の事物に就いてならば長い詳しい説明を與へることが出来るが、現時の活問題を捉へ來つて之を縦横に評論し新意見を吐露するが如きは、素より自分に適しないのである、併し乍ら元來學理上の研究と實社會の現象とは全く相一致せねばならぬものであると思ふ、兎角我國では學理と實地とは異つたものであるとして、實際上の事は實際上、學理上の事は學理上と區別し、學理の事は學者に委任し、實際上の事は實務家に委託すると云ふ風に差別を付けて考へて、學者と實務家との間

に一つの大きな障壁が設けられて居るやうであるが、學理と實際とは必ず符合しなければならぬものであるから、斯る障壁は速に撤廢する必要があると思ふ、例へば日本の國が多額の費用を投じて専門の學校を設け、學者を養成して居るのは果して何の爲であるかと云へば、是は言ふまでもなく學理を實地の應用に資せしめんが爲である、即ち學問の本來の目的は之を政治とか實業とか財政とか云ふ實社會の要務に當て嵌めて其參考に資する所がなくてはならぬものである、故に學者と云ふものも蠶魚に親しむばかりでなく、實社會の活問題に觸れて之を研究することを怠つてはならぬ、依て學者に於ても實社會の問題に就いて大に注意

を拂ふ必要があると同時に、一面社會に立つて居る實務家に於ても學者の説に耳を傾けなければならぬ、斯の如く兩者相俟つてするのでなくては國家經濟上非常な不利益を來すことと思ふ、夫であるから自分は平素世の中に重大事件のない時は口を禁んで圖書の間に埋つて居るが、日露戦争とか朝鮮の併合とか支那の政體變更とか、又今回の世界的大戰亂とか云ふやうな大問題が生じて其の解決が付かないと云ふ場合には、自分のやうな實社會に疎い者もさう云ふ活問題に就いて意見を述べると云ふ事は、是は決して僭越の事でないばかりでなく、又學者としての一の義務であると思ふ、斯う云ふ考から私は此の話を申述べるのであります

緒、昨年夏歐洲に於て此の大戦亂が勃發してより今日迄、既に一年有餘の歳月を経過せるに拘らず、此の戦禍は何時終熄するに至るべきか未だ全く豫測し得ない程である、獨逸の二國に對して英佛露伊白等は聯合して對抗し、此の戦争に参加しない歐洲の國々は、僅

かに、二三國であつて殆ど歐洲全體の戦争と見ても差支ない程の大戦である、嘗に歐洲のみに止まらず、遠く東洋に波及して我が大日本帝國は英國と同盟國たる關係上此の戦争に参加した、故に世界各國共此の戦争に依つて多少の影響を受けるのであるが、日本に於て受くる影響も決して僅少でない、斯の如き大規模の戦争と云ふものは、世界創造以來未だ嘗て見ない所であつて、斯う云ふ大事件が我々の目前に於て行はれて居ると云ふ事は、一は以て人類の爲に悲しむと共に、又之に依つて種々なる經驗と教訓とを得て、我々の研究上得る所多い事を喜ぶのである、此の戦争に關係せる國々が現に蒙りつつある禍害は實に悲惨極まるものであつて、殊に白耳義の惨状は我々日本人の如く未だ嘗て外國の爲に蹂躪されたことのないものには想像し得ない程である、總て戦争の悲惨なることは實戰に臨んだ軍人は目撃して知つて居るであらうが、全く修羅の巷と云ふ通り地獄のやうな慘憺たる光景が展開されるのである、さう云ふ淺ましい有様に西洋諸國が陥りつ

つあるにも拘らず、我が日本帝國が英國と同盟國たる義務を履行せんが爲に、一度獨逸に向つて宣戰を爲し其の根據地たる青島を忽ち奪取して仕舞つた後は、天下泰平四海浪靜かとなり、歐洲戰亂の悲惨事は單に新聞紙上に於て其の一片を窺ふに過ぎない、誠に泰平無事の天地である、即ち歐洲の方を地獄の修羅道に譬へれば、我が日本は正に極樂か天國かパラダイスか、洋たる平和の光に満ち充ちた樂土であると言はなければならぬ、是は一は日本の國が歐洲戰亂地より隔絶して居る地理的關係もあるが、又我が皇上的御聖徳に依るものと信ずるのである、斯う云ふ時に方つて今年御即位の大典を擧げ、同時に大嘗祭を執り行はせらるゝと云ふのであるから、日本の國には尙一層祥瑞の氣の溢るゝを覺ゆるのである、此の御即位と大嘗祭に就ては種々なる解釋があるが、日本の天皇陛下が帝位に即かるゝと云ふことは、歐羅巴の諸國の帝王が帝位に登ると少しく其の趣を異にして居る、即ち神武天皇以來皇統連續として天壤と共に窮りなき所の尊き

御位に即かるゝ、現身神の御位に即かるゝと云ふ深玄なる意味を持つて居る、歐洲諸國の帝王の位と云ふものは日本萬世一系の帝位に比すれば餘程淺薄なものである、夫から大嘗祭と云ふものは、天皇陛下が天照大神を始めとして天神地祇八百萬の神々を祭り、五穀の豊穰を御祈念遊ばさるゝ御儀式であつて、其の御禮として神様に黒酒白酒や海の幸山の幸を饗せらるゝのである、毎年の神嘗祭も之と同様の意味で執り行はせらるゝのである、之が大嘗祭の意味であるが、我が天皇陛下には臣民が取つて以て生を營む所の穀物の極めて大切なることを思召され、臣民の生活に幸多かれ、青草に惠の露濡へと祈られて、年々の神嘗祭及び即位の際の大嘗祭が行はるゝのであると云ふことを忘れてはならぬ、臣民の爲に、五穀豊穰を祈らせ給へる御慈愛深き大御心を知らずして、唯御馳走を頂く式であると云ふやうな暢氣な考で居ては、此の御儀式を行はせらるゝ本旨に副はないものであると思ふ、要するに天皇陛下が我が臣民を深く愛撫し給ふことは何事を見

ても知らるゝのであるが特に大嘗祭神嘗祭に於いて臣民に恩惠を施し臣民を饒る所の御精神が著しく顯現されて居るやうに拜察さるゝのである、我々臣民は斯る厚き大御心に對して答へ奉る爲めどう云ふ覺悟をせなければならぬかと云ふことを深く考ふる必要がある、陛下より御惠を賜はり、我々は其の恩に狎れて泰平に、暢氣に構へて居るやうなことがあつては甚だ不心得と言はなければならぬ、此の大御心に對し我々臣民が最も眞面目に考ふべきことは即ち時局に對する我々の覺悟ではあるまいか

歐洲諸國が慘鼻を極むる修羅の巷と化せるに拘はらず、我國のみが獨り平和の光に浴し得るは何故であるか、此の平和の日は果して永久に續くものであらうか或は我が日本に於ても何時か近い將來に劍戟を執つて立つべき日の來ることがないであらうか、詰り此の際日本の國の將來の運命に就いて深く考を致し豫め決心の睛を堅めて置くと云ふことは、御慈しみ厚き陛下の大御心に對し奉るべき我々の義務であると信ずる、

そこで、歐羅巴及亞細亞の大陸は二つの別々な大陸ではなく、之を一つの洲と島とユーロアジア即ち歐亞洲と總稱して居る、今此の歐亞洲即ち歐亞大陸に於て最も窮迫せる境遇に在るものは獨逸であつて、最も幸福なる地位に在るものは日本である、然らば何が故に獨逸は斯の如き逆境に陥りたるか、日本は何が故に斯う云ふ泰平を樂しみ享けて居ることが出来るか、之を説明するにはどうしても稍々古き歴史に遡つて考へて見なければならぬ、由來獨逸の國は陸に發展せんと欲すれば露西亞より壓迫せられ、海に延びんと欲すれば英吉利の爲めに遮られ、海陸共に進路を塞がれて仕舞つて居る世界に驥足を延ばすことが出来ない地位に在る故に獨逸では數十年來此の中の一國を擊破して何れかに進路を開き、大に世界に雄飛せんことを望んで止まなかつた、此の國力發展の熱望が獨逸を驅つて遂に此の大戦亂を惹起せしむるに至つたのである、而して英吉利が世界の最大強國として覇を稱へて居る所以のもの、文化の優秀なるに依ること勿論であるが、又領

土の廣大なる爲であつて、亞細亞、阿弗利加、濠洲、加那太等種々の領地があるが、其の中最も本國と密接なる關係を有し重きを爲して居るものは亞細亞の殖民地である、亞細亞の中には古より世界の寶庫と稱せらるゝ所の印度を領有し、香港、新嘉坡、威海衛等を治め、尙支那揚子江の沿岸に於ても大勢力を振ひ、其他歐羅巴より日本に至る迄の海路の要所要所は、チブラルタル、マルタ島、蘇士運河等悉く英吉利の手に歸して居る、要するに英吉利が世界に重きを爲すのは亞細亞の方面に於て最も有利なる土地を支配し且つ大勢力を振つて居るからだと言つて差支ない、日本を除いた外の亞細亞の諸國と云ふものは、皆直接間接に英吉利の影響を被つて居るではないか、夫から露西亞も何故世界から重要視されて居るかと言ふに、是亦領土の廣い爲め殊に亞細亞の方面に於て多くの土地を領有して居るのに依るのである、コーカサス、ルシアン、トルキスタン、西北利亞、滿洲、蒙古等、兎に角亞細亞の北の半分は露西亞の手に歸して居る、露西亞は文化の點

より言へば他の歐洲諸國の何れよりも劣るとも優ることとはない程であるにも拘らず、世界強國の一とされて居るのは亞細亞に多くの領土を有するからであると言つて宜しい、斯う云ふ有様であるから今度若し獨逸が英露の二國を破ることが出来たならば、亞細亞の形勢に非常なる變動を來すことになる、即ち歐洲大戰の交戦國は歐羅巴の一隅に存在して居る國であるが、其の勝敗の齎す所の結果は直に亞細亞の形勢に影響する、更に言葉を変へて言へば亞細亞に於ける英露の領土を奪取せんが爲に獨逸は開戦したものと云ふことが出来る、即ち此の歐洲戦争の原因は亞細亞に在るのである、今亞細亞大陸と云ふものを真中から東西に線を引きて區劃すれば、北の一半は露領、南の一半は英領となつて、亞細亞は恰も二つの西洋人に依つて蠶食されて居ることが分る、併し乍ら此の亞細亞が他人種の爲に侵さるゝと云ふことは近來に至つて始まつたことではなく、亞細亞の歴史を繰れば極く大昔から亞細亞の北方に武力を有する民族が起つて、南方の民族を征服し

たと云ふ事例に乏しくない、先づ支那は常に北狄の爲に邊疆を脅かされ、遂に北狄に併合されて仕舞つた、印度に於ては中世期の頃回々教徒其他北方民族の侵入に悩まされ、又波斯も北狄に征服され、尙亞利比亞、小亞細亞も土其古も北狄の爲に遂に併合された、斯う云ふ風に兎角亞細亞は侵略され分割さるゝ性質を持つて居つて、現在に於ては上述の通り南北の二つに分れ南北は海洋的にして文明國の英吉利を以て代表せられ北部は大陸的にして稍野蠻の露西亞を以て代表されて居る、此の英露二國が南北から相睨み合の姿になつて居る所の歐亞大陸と云ふ洲の東と西の兩端に立つて居る所の二つの相似た國がある、東に立つて居るものは言ふ迄もなく日本帝國である、日本は三千年の古より今日に至る迄、亞細亞の他の諸國の興亡に煩はされず嚴然として金剛無缺の國體を維持して來て居る、歐亞大陸の西端に位し日本と略同じやうな關係になつて居るものは即ち獨逸である、日本と獨逸とは大陸を隔てて東と西より相對して居る國である、東西より相對し

て居る日獨兩國は聯合して以て大陸を南北に分けて居る英露二國を撃破するのが自然の關係であると言はねばならぬ、日本人も非常に強い、獨逸も亦非常に勇敢だ、此の二國民が提携して立てば亞細亞大陸の敵たる英露を粉碎すること決して困難ではない、故に日本が英國と同盟したのは間違である、日本が大なる發展を遂げんと欲せば英國の勢力を全く亞細亞より驅逐し去らねばならぬ、英國と手を握るべき筈がない、併し乍ら之を深く考ふれば、日本は其の敵の一たる露西亞を討つ手段として段々便宜上英吉利と結んだのである、本來ならば日本は英露二國を敵として兩國の勢力を一時に亞細亞より掃蕩して仕舞いたいのであるが、日本の力未だ微弱にして露西亞一國と戦ふことすら、既に非常に困難なるに鑑み、先づ英吉利と同盟し、其の力を借りて露西亞に勝たんと巧妙に計畫したものである、されば日英同盟は一時的の變則の現象である、獨逸の敵も英露、日本の敵も英露、ユーロアジアの地位の上より言へば、日獨兩國は互に提携して共同の敵に當る

べき筈である、歐洲大戦争勃發の當初、獨逸人が日本人は必ず之を機會に獨逸に同盟して東の方から露西亞の盧を衝つてあらうと考へたことも無理ならぬ事と考へられる、然るに獨逸は唯自國の強を恃んで同時に英露の二強國を相手取り戰を開いたが、成程獨逸人は強い、昨年來の戰闘振りを見ても獨逸人の武勇の程が窺はれる、強いと云ふ點に於ては日本を除いては他に類がない程である、併し自國の強を過信して英露二國を一時に敵にして仕舞つたことは獨逸の一大失策ではあるまいか、日本人如何に勇敢なりと雖も英露二國を相手にしては勝算聊か覺束ない、故に英國と結び其の財力に依つて日露戰爭に成功するを得たのである、獨逸が陸の方面に於て露と戰はんと欲したならば英國の歡心を得て置かねばならぬ、海の方面に於て英國と争はんと欲するならば露と結んで置かねばならぬ、此の兩者を共に敵とし腹背より挾撃せらるゝに至つたことは、今後如何なる事情に依り獨逸が成功しても最初の外交の失敗を償ふことは出来ぬ、獨逸が日本のや

うに他の一國と結ぶことが出来なかつたのは、騎虎の勢ひ已むを得ざるものがあつたからであらうが、二國を相手にしたばかりでなく、其の二國に附屬して立つた國も澤山あつて、遂に四面より包圍攻撃を受けることとなつた、果して之を切り破ることが出来るかどうかは全く疑問であるが、兎に角之だけ引受けて苦戰惡闘して居る獨逸人の勇氣精神、武者振と云ふものは我々は誠に讃嘆せざるを得ないのである、若し外交が巧妙であつたならば獨逸も斯く迄苦しまずに済んだであらう、併し乍ら戰爭の勝敗の結果は未來に屬す、未來の事は神ならざる者に能く知ることが出来ない、此の戰爭は果して聯合軍側の勝利に歸するか、或は獨逸の勝利となるか元より斷言することが出来ない、併し此の世界の種々の事物の發展して行く順序より大觀すれば、小さいもの弱いものは次第次第に大きいもの強いものに併合されんとする一つの傾向が見える、世の中が進むに従つて小さいものは悉く包圍されて仕舞つて此の全社會が將來一つに統一されんとするプロビデン

ス(天意)のやうなものがあることを感ぜざるを得ない此の戰爭がどう云ふ風に結末が付くか全く不明であるとしても、要するに歸着する所は小さい國々は、皆地圖の上より抹消されて英獨露のやうな大きな國の中へ合體されて仕舞ふことになる、斯して歐羅巴の方が一段落付いた後は、若し獨逸軍が聯合軍の爲に押さへ付けられて仕舞へば、露西亞は次第に東洋方面に手を延ばし、英吉利も益々亞細亞に對する壓迫の力を加へ來り、結局日本に取りて最も恐るべき敵なる英露二國の勢力を増大ならしむることになる、英吉利の勢力が増せば日本は海に向つて發展することが出来ぬ、露西亞の勢力が加はれば日本は大陸に向つて進路を開くことが出来ぬ、此の二國の利害に衝突せざらんと欲せば、日本は陸に於ても海に於ても全く發展の途が無くなつて仕舞ふ譯になる、又亞米利加も日本の隆盛を惡んで居る、斯うなれば日本はどうしても孤立の地位に陥らなければならぬ、之に反して獨逸が勝つことになれば日本に對する膠州灣の恨みを復讐するは元よりであつ

て、是れ亦日本の爲め容易ならぬことである、故に何れが勝つにもせよ、兎に角此の戰爭の終結後の大體の傾向と云ふものは、日本に對し英露又は獨逸の壓迫が尙著しく加はるものと豫め覺悟する所がなくしてはならぬ殊に歐羅巴に於てバルガン半島の諸邦が併合せられ、又白耳義其他の小國が片付いて仕舞つたならば列強は次にどの方面に對し侵略の爪牙を向けるであらうか、最も弱いものが一番先に睨まれるのは自然の命數である、即ち壓迫の手は亞細亞殊に支那方面に向つて集まつて來るものと覺悟しなければならぬ、支那は我が國と唇齒輔車の關係を有し、其の興亡は帝國の消長に至大の關係を持つて居る、斯う云ふ形勢になるのは果して十年の後か二十年の後か豫測することは出来ないけれども、兎に角斯う云ふ場合に立ち至ることは火を賭るより明かなことである、今後日本が斯の如き地位に陥るものであると云ふことを泰平無事の今日より豫想して、之に處するの道を考へることは所謂治に居て亂を忘れざるものであつて、是れ皇室の厚き御惠

に浴せる我々臣民の義務ではあるまいかと思ふ、斯う云ふ考を以て今年の御即位並に大嘗祭に對するならば上下一致して國家百年の大計を遂行するに努力することが出来、御大典をして一層意義深きものたらしむることを得ると信ずる、此の盛典を挙げさせらるゝに當り日本の前途の難關を憂慮すると云ふことは、俗に言ふ縁起が悪いと云ふ人があるかも知れぬが、元來天皇陛下が我々を慈しまれると云ふものは此の日本の國家を我々國民と共に盛んならしめ、決して外敵の侮りを受けざる様にし、且つ萬世の後迄も國體を維持せんとする大御心に外ならぬのであるから、上に斯る聖天子を戴く我々臣民は今日より豫め歐洲戰亂終了後の我國の地位を考へて置くことは少しも差支ないばかりでなく、是れ聖恩に答へ奉るべき唯一の途であると思ふ、然らばどう云ふことを考へよう云ふ覺悟を持つて居なければならぬかと云ふに、前述の通り歐洲諸國の壓迫が東洋に加はると共に、日本の地位は困難になり我國の責任は重くなる、一體世の中の文化の度が進

むに従つて其の便利を享けると共に、一方に於ては苦痛とか努力とか云ふものが増すのは數の免れない所である、世が開ければ野蠻時代のやうに暢氣に構へて居ることは許されぬ、精出して働かねばならぬ、夫と同一く國が盛大になれば其の國民の負擔とか義務とか勞苦とか云ふものも増す譯であるが、日本の國力發展上將來國難に際會した時之を切抜けんとするに就いては國民は如何なる教養を要すべきかと云ふことは今日の宗教家、教育家、政治家等各方面の人が眞面目に考察して置かねばならぬ重大問題であると思ふ、數十年前迄日本は東洋の雄の一小國として世界から唯だ小さい可愛らしい綺麗な國であると考へられて居た、夫が一躍して世界列強の仲間入りをし恐れを抱かしむる程に至つたのは抑々何に依るか、之には種々原因もあらうが、先には支那と戦つて勝ち後には露西亞を攻めて之を敗つた所の戰爭に強いと云ふ事、今の日本の小供は戰爭と云ふものは必ず勝つものと思つて居る程強く、外國と戦ふ毎に勝利を得て居ると云ふことが日本をし

て今日あるを得せしめたのである、畢竟日本は強大なる武力があるが故に世界に重きを爲し、且つ其地位を維持して行くことが出来るのである、英國が日本と同盟したのも日本の武力に信頼したからである、故に日本は今後決して此の武と云ふことを閉却することが出来ないばかりでなく、尙一層之を盛んならしむる必要がある、國際の競争場裡の最後の判決は唯武力に依る、日本にして若し武備を怠つたならば遂に滅亡すると自分分は斷言して憚らぬ、されば國民一般に益々尙武の氣象を養ひ飛行機潜航艇等有る武器を發達せしめ、其他各方面に尙武の風を發揮すると云ふことは、我が國家將來の安全を保證する上に於て最も必要であると思ふ、痛切に感じて居る、自分は極めて熱心なる尙武論者である、併し我國をして唯武一點張りの野蠻國たらしむると云ふ趣意ではない、武を奮ひ兼て文を修むると云ふのが理想である、元來亞細亞の民族は各々一方に偏する傾きがあるやうに思ふ、亞細亞の北方の民族は土耳其人蒙古人等武一方に偏した爲め遂に衰退した、又亞細亞南方の支那、印度、波斯等の諸國の民族は文に偏したる爲め同じく衰退した、要するに一方に偏しては國家を維持することが出来ぬ、而して亞細亞に於

て此の文と武と兩方を調和して兼ね有する所のものは獨り我が大和民族の日本の國あるのみである、之が日本他の亞細亞の諸國と違ふ點である、文を有しても支那の如く文弱でない、武を有しても蒙古人の如く粗暴に流れない、文と武が巧妙に結合して一つとなり大和魂と云ふ美しい國民的性格を成して居る、是が日本の特長である、歐羅巴の國に於ても同じやうな傾向がある、露西亞は武に偏して居る缺點がある、英吉利は文に偏して商業の方に重きを置いて武を怠つて居る嫌がある、斯て露西亞人は蒙古人の如き蠻的性格を有するが故に、蒙古の方面に多くの領地を有し、英吉利人は亞細亞の南方諸國の如き偏文的性格を有するが故に同じく亞細亞の南方に殖民地を持つて居る、要するに偏するは即ち缺點である、此の缺點を除き文武の二つを併せ有する歐洲人は即ち獨逸民族である、獨逸は文化の點に於て世界に燦然たる光輝を放つのみならず武力に於ても日本を除いては世界各國中之に敵するものはない、此の文武共に優れて居ると云ふことは今日獨逸が歐洲諸國を敵に廻はして後れを取らない所以である、前に述べた通り地理上及政治上の關係が日獨共に類似して居るばかりでなく、文武兩道を兼ね併せて居

ると云ふ點も日獨共に大に趣きを同うして居る、さう云ふ譯であるから、我が日本に於ては將來尙武の氣象を益々養ふと共に一方文化と云ふ方面も大に進ませなければならぬ、文化を發展させると云ふことは取りも直さず武を發展せしむる途である、文と武とは決して離れて居るものでない、世間の人は文事を餘りやると人間が文弱に流れて仕舞つて尙武の氣象を失つて仕舞ふかの如くに考へて居るが、夫は文と云ふものを昔流に解釋して、儒學と言へば廣く儒者のこと、考へて居ると云ふやうな文學ならば夫は止めた方が宜い、併し文と云ふものは物質的の武に對して、精神的方面の修養と文明科學の研究とを稱するものであつて、武と共に兼ね備つてこそ始めて國家の進運を期するを得るのである、又世人は文と武とを相容れざる別箇のもの、やうに考へて居るが夫は間違つて、文と武とは離るべからざる關係を有するものである、文事を發展させれば一徹に國家が亡びると思ふのは大なる誤解である、其の適例は獨逸が我々の眼前に示して居る所を見ても明らかでないか、さう云ふ譯であるから日本は今後に於てどこ迄も尙武の氣象と云ふものを發展させると同時に一方に於ては文の精神的方面を進ませなければならぬ、文武二途を進ませせることは又日本の完全なる獨立

を打立てる所以である、日本は獨立せるが如くにして實は未だ完全に獨立して居らぬ、日本は列強の仲間入りをして爲し、遂には獨逸を破る戰爭には勝つて居るけれども、是は唯武の一方面を表はしたのみであつて、文化の點に於ては日本が未だ獨立して居ない證據である、外國から機械とか藥品とか其他種々のものが來なくなると日本は忽ち窮して仕舞はなければならぬ、是れ文化の點に於て日本が未だ獨立して居ない證據である、武の方は完全に獨立して居ても、文の點に於ては、日本は情無い故、自ら立つ力がない、獨り藥品機械ばかりでなく日本の道徳、宗教、倫理、教育等悉く未だ徹底的に獨立して居ない、例へば教育に就いて言へば、全國に在る七つの高等學校は何の爲に置かれてあつて何を教へて居るかと云ふに、主として英獨佛三國の外國語を教ゆる爲であつて學生は之に貴重なる三年の歲月を空費して居る、爲めに早く大學を卒業することが出來ない、若し日本の文化が眞に獨立して居る世界の何れの國よりも優れて居るものであつたならば餘計な外國語の學習に苦しんだり外國の思想文物の吸

收に努むる必要がない、日本の高等學校のやうな制度が歐羅巴のどこの國にあらうか、是は獨り日本のみにあるのである、日本人は外國語を學ぶことを少しも怪しまないが、之れ文化の點に於て未だ獨立して居ないと云ふ最も屈辱の狀態に在ることを表はすものに非ずして何ぞやである、故に武の方に於て如何に秀でて居つても文の方で並行して居ないから、武で得た利益を文で失ふと云ふ愚を演じて居る、例へば滿洲の方面で戰爭して之を日本の勢力圏内に置くことが出來ても、滿洲へ行つて有利なる商業を營むことも出來ないし、又此の利益を開拓する方法も知らない、何故かと云ふに此の方面の地理に通ぜず、歴史を知らず、地質に暗く人情風俗を知らず總て文の方面が進んで居ないからである、故に武と文と兩方發達しなければ一國の隆盛は望むことが出來ないと云ふことは現に事實が我々の眼前に示して居る所である、併し日本は兎に角後進國であるから一足飛びに進むことは出來ないから、今の中は西洋人に必要のない外國語でも何でも一生懸命に勉強して外國の文化を奪つて日本に植付け、一日も早く彼等と同じ地平線に達するやう努力しなければならぬ、又文化が進み智識が高されれば人の徳性も夫に應じ

て養はれるものでないかと思ふ、例へば選舉と云ふことが如何に國利民福に關するものであるかと云ふことを徹底的に理解したならば、即ち選舉に就いての智識が高まるならば、金錢を以て投票を賣買すると云ふが如き不道徳なることは行はれないやうになるであらう、詰り智識が進めば従つて徳性の發達を促すことになるのである、今より三千年の昔印度に於て佛敎を開かれた釋迦は最も徳の高い方であつたが、又同時に當時の印度に於て最も深い廣い智識を有して居られた大智者であつた、釋迦が斯る徳の高い方になられたのは一つには非常に深い智識を持つて居られたからであると思ふ、何故ならば徳と智とは非常に密接な關係を持つて居るからである、私が文を進めよと云ふのは此の徳と智とを相共に進めよと云ふことであるのである、要するに此の時局に際して我が國民は國家百年の大計に就いて大いに反省し覺悟を定むる所がなくてはならぬが、之れ聖恩に答へ奉ると共に我が國將來の興隆を期する唯一の途であると思ふことを申し上げたのである (明治聖德紀念會に於ける講演)

道德と信仰の契合

三 上 義 徹

近來、内外の思潮甚しく混亂し道義の頹廢其局に達せるは、誠マコトに痛嘆ツツミに堪へざる次第である、斯の如き状態は其原因する所種々あるべしと雖、教育界にも宗教界にも將た政治界にも、總てを一括して之を考ふれば、一國の全方面を支配する權威ある大道の明かならざるに基因する事と信ずる、人は道義を蹂躪する人々の多くなりしを見て、宗教家や教育家が責任を盡して居らない結果であると云ふも、さう云ふ考察は正確ではない、誰れが責任を負ふとか負はぬと云ふのは抑も末の事である、それは國民全體の責任であつて、其國の風物文物より來るのである、この頃は非常に殘酷なる人殺しなどが殖えて來た、悪人が多い、然しこの悪人には遺傳もあらうが、家庭なり社會境遇の關係が大罪を犯さしめて居るのであると思ふ、人間の性質はさ

う悪いものでない、其人が求めて墮落しようとするのは學問の爲め、之に明かなる人生の針路を示すことが出來るならば、善良なる生活を營む人となる、一國に全般の人を導く所の教が確立して居るならば、道德的權威は尊重せらるゝのである、我國に於ては風教問題フウキョウモンダは攻究せられて居るべき筈なるも、どうも多くは議論である、思想界を支配する卓越せる大道が行はれて居らぬ、勿論局部的の道德は行はれて居るが、根本的に人生の徹底的自覺がない、局部より全體に向つての方法を講ずるのが急務である、法華經主義は局部より大道に向つて進むべき事を教へたのである、而して法華經主義は道德上の原則と宗教上の信仰が調和されて居るおよそ宗教を離れたる道德は根底を失ふが故に動搖を免れぬ、現に忠孝道德に對する國民の意識は如何であらう、今の青年に對して君に忠を盡し親に孝を致さねばならぬ所以を問はば、明瞭なる答辯を爲すものが甚ない、即ち忠孝倫理の意識が不透明になつて居る、或る教育家が國家の大事なる事を懇切に教へた處が、學

生は有力なる理由がないと云ふて國家思想を疑ふたと云ふ事を聞いた、日本人が國家思想を疑ふと云ふ事は容易ならざる大問題である、教育も詰込主義では何等の效能がないのみならず、反て智識の一面のみ進歩するので弊害が多くなつて始末に困る、されば我國民道德に於ては宗教を根底とせなければ役に立たぬ、道德の内容に宗教を加味せざれば實踐觀念が缺けて來る、日本人が君に忠を盡すと云ふ心が動かねば日本人でない、忠義道德實行の決心がなければ日本人たるの資格がない、斯かる道德實行の決心は何に依つて起るのであらうか、之は天地を貫いて一番偉いものを信ずると云ふ心から湧き出づるのである、信ずる心が大事である、天地間には絶對無限の廣大なるものが存して居る、之を疑ふべきものでない道德性の廣大なるものがある、この廣大なるものに照されて居る觀念が強くなければならぬ、心の奥底より眞面目に照されて居ると云ふ事に氣付ねばならぬ、人の本性には誠がある、誠あればこそ人は尊といのである、特に東洋道德は之を教へて

居る、孔子は家を齊へ天下を治むるには誠を本とせねばならぬと言ふて居る、我軍人に賜はりし勅諭には一誠以て五ヶ條の精神と仰せられて居る、教育勅語の十六ヶ條の徳目も一誠を本となすべきである、誠は總ての人に内在して居るが、之を喚び出す方法を講ぜねばならぬ、此の誠の大本が廢るれば萬事徒事である、誠の道を明かにするは聖賢の道である、此道は千古萬世に亘りて儉らざる真理である、儒教に於て至誠と云ふは、宗教には信仰と云ふのである、儒教には心の底から迷の夢を醒ますと云ふまでに進んで居らぬが、宗教は根本覺醒を與ふるものである、由來天地には一種の靈氣がある、正大の氣が充實して居る、科學的の空氣を吸つて居るのは肉體であるか、正大の氣を吸はねば眞實に人間は生きて居られぬのである、即ち天地絶待の氣と一致して行くのである、所謂宗教と道德とを調節して、道德に對して信仰の根底を與ふれば、道德は動搖を來さずして實踐的となる、而し宗教者が信仰を道德的に導くことを忘れて個人慾望のみに囚はれて居

兵庫

- ▲九月四日夜明石町圓乘寺に禮香會
- ▲南無の意義 川崎 英照
- ▲國家の宗教 萩原 啓門
- ▲十日明石公會堂俱樂部講演 川崎 英照
- ▲法華經講義 川崎 英照
- ▲十一月同公會堂に郡役所克己會講演 川崎 英照
- ▲理想的宗教 川崎 英照
- ▲十八日夜明石町圓乘寺に清談會を催す
- ▲十九日夜明石町圓乘寺内奥田君會會長宅に修養會 川崎 英照
- ▲通境に處するの覺悟 川崎 英照
- ▲廿日夜明石公會堂俱樂部講演 川崎 英照
- ▲法華經講義 川崎 英照
- ▲廿四日榎屋町藥師寺氏宅に講話 川崎 英照
- ▲御遺文講義 川崎 英照
- ▲廿七日午後圓乘寺に被摩會法話 川崎 英照
- ▲信仰的生活 川崎 英照
- ▲大阪 五月午後八時中寺町蓮成寺に日蓮主義講演 榎木 日種
- ▲實六の本義を發揮せよ 榎木 日種
- ▲現と永世 京藤 義應
- ▲法華經の大要 榎木 日種
- ▲六日生玉前町堂關寺講演 榎木 日種
- ▲信仰と實生活 榎木 日種
- ▲知恩報恩 榎木 日種
- ▲法華行者の戒體 榎木 日種
- ▲十二日同寺に講話 榎木 日種
- ▲立正安國論 榎木 日種
- ▲行淺功深 榎木 日種
- ▲十二日午後蓮成寺に龍口法難會 榎木 日種

遠疾傾成

- ▲十三日午後七時同寺に講演 榎木 日種
- ▲日蓮上人の人格の一端 京藤 義應
- ▲婦人と信仰 榎木 日種
- ▲法華經と日本國 萩原 啓門
- ▲廿二日生玉前町堂關寺婦人會講演 京藤 義應
- ▲觀世音の三昧 橫山 惠正
- ▲現世菩提の特長 川崎 英照
- ▲日蓮主義の特長 川崎 英照
- ▲廿四日午後蓮成寺被摩會講話 榎木 月種
- ▲自覺と信仰 榎木 月種
- ▲八月廿九日美作吉ヶ原本經寺講演 榎木 月種
- ▲岡山 祖書奉讀 榎木 月種
- ▲因縁に就て 榎木 月種
- ▲大聖人の至孝 榎木 月種
- ▲至誠貫天 榎木 月種
- ▲九月二日和氣小林吉松宅に五日森實宅に同夜芳井忠太宅に十二日川口品造宅に廿一日夜吉岡忠太郎宅に何れも迷信斥破の必要の爲め原田日男師の講話あり 原田 日男
- ▲十五日夜和氣町本成寺婦人會講演 原田 日男
- ▲念願力 原田 日男
- ▲十六日同寺同信會講演 原田 日男
- ▲念寫に就て 原田 日男
- ▲廿一日同寺に被摩初日講演 原田 日男
- ▲禮祭の徳 原田 日男
- ▲廿四日本成寺中日講演 原田 日男
- ▲佛陀と年代 原田 日男
- ▲廿七日本成寺被摩法日講話 原田 日男
- ▲神佛と死生 原田 日男

廣島

- ▲八月二十九日午後廣島市新川場町本照寺に講演會 大橋 日鏡
- ▲開會の辭 川崎 英照
- ▲教化の因縁 川崎 英照
- ▲南無の意義 川崎 英照
- ▲人生の意義 川崎 英照
- ▲同日夜同寺に第二回講演會 川崎 英照
- ▲國家と宗教 富本 會榮
- ▲人生の力 川崎 英照
- ▲道徳と宗教 川崎 英照
- ▲宗教意識の概念 川崎 英照
- ▲三十日午後同市松川町妙詠寺講演會 川崎 英照
- ▲開會の辭 川崎 英照
- ▲活ける佛教 川崎 英照
- ▲婦人の自覺 川崎 英照
- ▲日蓮主義者の家庭 川崎 英照
- ▲同日夜同寺に講演會 川崎 英照
- ▲現代と信仰 川崎 英照
- ▲理想的宗教 川崎 英照
- ▲伊勢大廟と日蓮聖人 川崎 英照
- ▲三統包貫論 川崎 英照
- ▲三十一日午後可部町說教所講演會 大橋 日鏡
- ▲開會の辭 川崎 英照
- ▲器の四夫 川崎 英照
- ▲宗教の眞味 川崎 英照
- ▲同日夜同教會所に第二回講演會 川崎 英照
- ▲立教の精神 川崎 英照
- ▲眞に日蓮上人を解せよ 川崎 英照
- ▲願本したる道徳 川崎 英照
- ▲九月一日午後吉田町蓮華寺講演會 川崎 英照
- ▲開會の辭 安田 台城

信仰の内言

- ▲修養論 中原 通應
- ▲國民の信念 榎川 日堂
- ▲同日夜同寺に第二回講演會 榎川 日堂
- ▲日蓮上人の佛教觀 川崎 英照
- ▲日蓮上人の人生觀 川崎 英照
- ▲日蓮主義の忠孝觀 榎川 日堂
- ▲二日午後多治比大徳寺講演會 榎川 日堂
- ▲開會の辭 天崎 會温
- ▲歡喜の生活 中原 通應
- ▲世法開顯 川崎 英照
- ▲畢竟住一乘 榎川 日堂
- ▲同日夜同寺に第二回講演會 榎川 日堂
- ▲大法の光顯 川崎 英照
- ▲身護論 榎川 日堂
- ▲秋閑具足道 榎川 日堂
- ▲三日午後井原高源寺講演會 榎川 日堂
- ▲開會の辭 榎川 日堂
- ▲今正是其時 榎川 日堂
- ▲信仰と生活 榎川 日堂
- ▲隨順行大道 榎川 日堂
- ▲同日夜同寺に第二回講演會 榎川 日堂
- ▲信心決定の妙談 榎川 日堂
- ▲佛教の二大要領 榎川 日堂

むや切也

- ▲長州 九月一日秋玉江浦遠洋漁業組合事務所講演 榎川 日堂
- ▲説教密輸入に就て 榎川 日堂
- ▲實行的の道徳 榎川 日堂
- ▲四日秋鶴江漁業事務所講演 榎川 日堂
- ▲遠洋漁業者の注意事項 榎川 日堂
- ▲著財思想と青年 榎川 日堂
- ▲國民道徳(其一) 榎川 日堂
- ▲國民道徳(其二) 榎川 日堂
- ▲九日同公會堂講演 榎川 日堂
- ▲二十一日秋町妙蓮寺講演 榎川 日堂
- ▲佛教の起因と傳來 榎川 日堂
- ▲二十二日より三日間同寺に講演 榎川 日堂
- ▲信仰と生活 榎川 日堂
- ▲宗教傳播 榎川 日堂
- ▲御大典に就て 榎川 日堂
- ▲佛子の自覺 榎川 日堂
- ▲二十七日三隔了性院講演 榎川 日堂
- ▲各宗教の眞價 榎川 日堂
- ▲信仰の實現 榎川 日堂
- ▲九州 九月六日午後、久留米市本泰寺講演 榎川 日堂
- ▲國法の功徳 榎川 日堂
- ▲九月二日午後同市井上房太郎宅講演 榎川 日堂
- ▲女人成佛 榎川 日堂
- ▲報恩の眞意義 榎川 日堂
- ▲廿一日午後柳川町妙經寺講演 榎川 日堂
- ▲感徳道交 榎川 日堂
- ▲宗教と家庭 榎川 日堂
- ▲廿四日午後久留米市本泰寺講演 榎川 日堂

宗教的訓練

- ▲同日午後八時同寺講演 榎川 日堂
- ▲宗教信仰の活現 榎川 日堂
- ▲廿七日午後同寺講演 榎川 日堂
- ▲信仰と職業 榎川 日堂
- ▲大本尊の本質 榎川 日堂
- ▲同日午後八時同寺講演 榎川 日堂
- ▲本尊の力用 榎川 日堂
- ▲千葉縣 八月廿六日長生郷庄吉福正寺講演 榎川 日堂
- ▲開會の辭 榎川 日堂
- ▲信仰の實感 榎川 日堂
- ▲信徒の意得に就て 榎川 日堂
- ▲異體同心抄に就て 榎川 日堂
- ▲哲學と宗教 榎川 日堂
- ▲萬物の靈長 榎川 日堂
- ▲宗教と社會 榎川 日堂
- ▲廿六日本納町龍教寺講演 榎川 日堂
- ▲開會の辭 榎川 日堂
- ▲理想と現實 榎川 日堂
- ▲同日夜同郡七渡龍監寺施餓鬼に際し長岡青鹿河野見中吉井乾清富田林惠等辻説法をなす 榎川 日堂
- ▲廿一日山武郡福岡村善立寺講演 榎川 日堂
- ▲信仰の要諦 榎川 日堂
- ▲九月一日同郡小中覺行寺施餓鬼説教 榎川 日堂
- ▲秋苦果往 榎川 日堂
- ▲三日同郡岡村本城寺講演 榎川 日堂
- ▲信じて而も信ぜざるもの 榎川 日堂
- ▲四日同郡桂徳寺講演 榎川 日堂
- ▲宗教家と坊主屋 榎川 日堂
- ▲十二日午後二時長生郷押日來光寺講演 榎川 日堂
- ▲龍口法難に就て 榎川 日堂

- ▲同夜同寺に講演
開會
山田 誠心
神谷 智響
- ▲十三日同郡原田もなかやに開會
開會の辭
竹内 顯領
神谷 智響
- ▲十四日長柄村風城小高氏宅開會
開會の趣旨
渡邊 乾航
神谷 智響
- ▲十五日同村舟木安樂寺開會
開會の辭
渡邊 乾航
神谷 智響
- ▲同夜同村山根滿藏寺に開會
開會
大川 日教
神谷 智響
- ▲十六日同村上野妙興寺開會
開會
山田 誠心
神谷 智響
- ▲十九日山武郡豐海村栗生納屋蔭時武雄氏邸に講演
開會の辭
花澤 輝泰
神谷 智響
- ▲現代道徳と日蓮主義
神谷 智響
- ▲今正是其時
神谷 智響
- ▲偉なる日蓮聖人
神谷 智響
- ▲廿日同郡北今泉婦人會講演
神谷 智響
- ▲廿一日日本納町蓮福寺講演
神谷 智響
- ▲廿一日山武郡福岡村桂山桂徳寺に長美明師の講演あり
神谷 智響

- ▲同日市原郡温津村壽福寺講演
時代の要求せる日蓮主義
今井 日省
眞操と信仰
横山 會草
- ▲同日同郡温津村下野本泰寺講演
因果應報
星野 純義
- ▲同日同郡温津村下野本泰寺講演
道徳要論
山下 通泰
- ▲廿三日午後山武郡横川三光寺講演
日蓮上人の一期の弘教と努力
小竹 俊雄
- ▲廿四日市原郡菊岡村行光寺講演
信仰の進化に就て
今井 日省
- ▲同日午後山武郡増穂村南富田福田寺講演
新國民の自覚
横山 會草
- ▲同日同村九十根善立寺に長美明師の彼岸會講演あり
同向の眞意と其功德
小竹 俊雄
- ▲同日小沼田要木寺に土屋眞容師の彼岸會講演あり
演あり
岡本 教一
- ▲廿四日東金町北之幸谷妙徳寺に講演
開會
土屋 賢生
- ▲佛とは何ぞや
竹内 無着
- ▲寺社の關係
成島 泰行
- ▲町自治の理想
神谷 智響
- ▲同日同郡白里村等覺寺に開會
開會の宣言
神谷 智響
- ▲佐渡の吹雪(統一節)
神谷 智響
- ▲同夜青年會開會
第三文明と日蓮主義
神谷 智響
- ▲青年の思想を論ず
神谷 智響
- ▲眞觀の新雨(統一節)
神谷 智響
- ▲七里法華の信仰繁榮
宮川 光熙

- ▲乃木將軍の國家觀念(統一節)
神谷 智響
- ▲廿五日同村小學校に開會
第二の日本模範者に告ぐ
神谷 智響
- ▲信仰と教育
宮川 光熙
- ▲由井ヶ濱の血涙(統一節)
神谷 智響
- ▲同日長生郡豐田村川代宗遠寺に長美明師の講話あり
神谷 智響
- ▲廿六日晝夜上代平左門氏邸に開會
日蓮上人と法然上人
神谷 智響
- ▲安國論の起草(統一節)
神谷 智響
- ▲信仰は奮闘に依て味識す
神谷 智響
- ▲土牢の冷風(統一節)
神谷 智響
- ▲乃木將軍の精忠(統一節)
神谷 智響
- ▲廿七日書白里村南今泉常連寺開會
宗教と藝術
鈴木 正二
- ▲日蓮主義の權威
神谷 智響
- ▲實相寺經藏の慘劇(統一節)
神谷 智響
- ▲廿七日大納町蓮照寺講演
人生問題に就て
神谷 智響
- ▲信仰の力
井口 善叔
- ▲同日豐成村宮高等小學校に帝國在郷軍人會主催の下に戦死病歿者追悼會を執行及び講演
成島 泰行
- ▲忠孝一本の大道
土屋 眞容
- ▲卅日午前御塚山日經上人御靈跡地前前に讀經講演
小竹 俊雄
- ▲日蓮上人と眞の忠臣孝子
小竹 俊雄

▲熱烈なる日蓮主義者たる猪又金太郎居士の砲兵工廠に於ける忠實なる勤務振りは一般の模範として推賞せらるゝ所なるが居士は晝食の休養時僅か十五分間を利用して同僚に宗教信仰の必要を力説する事一日たりとも怠るなく熱心之に當るがため未だ信仰の尊とさな知らざりしものも居士の熱烈に動かされて日蓮主義に轉じ来るもの多きを加ふるに至り近時居士は信仰の友と相謀り日蓮主義身讀會を設立し日曜祭日に相會して修養及信仰談を交換しつゝありと云ふ當世には珍らしき信仰家なりと謂ふべし

▲神田美倉橋郵便局長加藤龍圖居士は今同千葉縣東葛飾郡小金町本土寺の日蓮上人誕生靈蹟興隆の發願を爲し其趣意を公表せらるる斯かる願望せる靈蹟興隆の聖業や報恩の美風を喚起せしむるのみならず信仰家の自覺を促すの力あるを信ず事務の一切は居士自から之を處理し納金は多少に拘はらず芳名帳に記入し之を使用せざる方針にして費用は凡て自辨にて此業に當ると云ふ居士が敬虔なる態度と熱烈なる信念とは大方信仰家の之を成辨し得べきことと信するなり

謹告

啓白貴地方巡教の際は甚深なる御外護を受け到る處示教利喜の功果を收め感荷に不堪于此謹而諸氏の好意を謝し併て大法の宣傳を祈る

大正四年十月

監督布教師 笹川日堂

廣島山口福國縣下各寺院

住職檀信徒御中

鍊金鑿基靈藏物
御袈裟衣
水引打敷
莊嚴佛具
兼三ツト兼教法本

長生寺會のレキ事進セルハ

海老屋土川法衣店
住吉三番町六五〇番

長生寺會のレキ事進セルハ

本光院著

大説教書全

定價金五十四錢送料共

本書は本化妙道古今無双の大説教書にして内容は有名なる古人の説教初座より獨特の説教數座を加へ全卷悲話快話滑稽等、因縁澤山其他警諭難説及演説迄載せある萬世遺憾なき良典也

發行所

北天教光社

後志國古平港古平町 演町三六三 振替口座東京四七五二番

▶ 書叢究研義主蓮日 ◀

□ 山川智應居士著
日蓮聖人と耶蘇 (第壹編)

耶蘇教が將來の完全なる宗教たり得ざる原因を擧げ、耶蘇は遂に日蓮聖人の大と比すべからざる所以を痛論せる大文字也

□ 志村智鑑居士著

□ 國聖と**日蓮聖人** (第貳編)

日蓮聖人の偉大なる人格と深遠なる教義を力説し、聖人の國聖たる所以を鮮明にせるは本書也

□ 山川智應居士著

□ **種々御振舞御書略註** (第參編)

日蓮聖人運動の自叙傳たる本書を、理解し易く註釋を加へたるもの、研究者の必讀を要するに本書也

□ 田中智學居士著

□ **龍口法難論** (第四編)

重野文學博士の妄を駁して、日蓮聖人の眞面目を光揚せし近來の快文字也

〔研究叢書は一部金四拾錢(送料一部金四錢)〕

京東座口替振 白區川石小京東 所賣販
番〇四八八二 徹義上三 地番七十町前山

(しなは等違間ばら送てし入記へ購定所め求てに局便郵は紙用替振)

▲ 思想の界の教書 ▲

◎ 法華經講義並に橘香集は品切れとなれり

本多日生師講義

◎ 如來壽量品講演輯

壽量品の大意を知らざれば一代佛の中心を知らざるもの也佛教の活力眞價は壽量品にあり、讀め大に讀んで佛陀の眞精神に接觸せよ

定價金卅五錢 郵税金四錢

軍事教育會發行

◎ **精神の修養—思想の調整**

内容豊富立論堂々 近來の快文字 内容豊富立論堂々 近來の快文字

上下二卷 郵税金四錢

◎ 縮刷法華經と開結

菊判半截携帶に尤も便なり。紙製は賣切れ

布製天四十五錢 稅六錢

◎ 勤行作法

信仰者が朝夕の修行は嚴正にして、謬りなきを要す本書は日蓮門下を、通じて齊しく奉行すべき作法を示したる教典也

一部金五錢 郵税金二錢

◎ 立正安國論略解は三版出づ

一部金十錢 郵税金二錢

徹義上三 地番七十町前山白川石小京東 所賣販

〔番〇四八八二京東替振〕

天晴會講演錄 第三輯

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凜乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚し得て眞に徹底的なりと云ふべし人間の全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の内的生活の公開なり内容の如何に豊富なるかは一讀して之を知るを得べし

▲讀むべし 本書を讀むべし 本書は人格完成の好資料也

内容

■ 姉崎文學博士。本多大僧正。小原陸軍少將。松森權僧正。箕作法學博士。
 ■ 臨田大僧正。山田法學博士。柴田慶大教授。井村權僧正。小林文學士。
 ■ 石橋中將。笹川文學士。眞博。山根僧正。

▲今や燈火親しむべきの秋。人間道と佛界道との交通を究めよ

發賣所

東京市小石川區
白山前町十七

三上

義徹
發賣所 東京市小石川區
白山前町十七

定價金壹圓五拾錢
 本文約八百頁
 總クローヌス製美本
 日蓮上人御尊像及
 講演會寫眞入り
 送内 地拾貳錢
 料朝鮮滿洲臺灣四拾錢

青雲帽希教服袴 日宗法衣專門 飯田法衣店

東京市佛具屋町五條下
 振替口座大阪六八四七

定價表ハ尚申越次第
 何時までも御送申上候



▲交換——新聞雜誌。新刊書の寄贈其他
 申込及編輯に關する用件は必ず編輯所へ
 御送附の程願上候

大正四年十月十五日印刷發行

發行兼編輯人 東京市小石川區白山前町十七番地 三上 義徹
 印刷人 鈴木 日雄

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地
 編輯所 東京市小石川區白山前町十七番地
 統一團

本誌の定價	▲一部郵税共金六錢五厘○半年分金參拾九錢一ケ年金七拾八錢。新購讀者は前金拂込ざれば發送せず
廣告料	表紙うら。うら表紙一頁金拾圓半頁六圓。普通廣告は一頁金七圓半頁四圓希望の者は紹介の事
雜誌料	東京小石川白山前町十七番地三上義徹振替口座東京二八四〇番へ拂込むべきこと
金拂込	

日蓮門下七教團 統合大講習會 講演集 完

定價金壹圓五拾錢
本文約一千八十餘頁
講習會參列者寫真入り
送料(内地)十、(二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十)二十錢

▲六百年來の懸案にして現下宗教界の時事問題たる統合事業の第一序幕——第一回講習會に於て二週間六十八時間の諸名士の講演は、速記のまゝ之を編輯せり。各教團の意見の一斑は本書に公開せらる。教育家及思想家。若し本書を一讀せざれば時代に後るゝの失あり。燈火親しむべきの秋。大に本書を讀破して教團統合の理義に徹底せよ

▲品切とならば後悔あるべし至急申
込あれ 着金次第即時發送すべし

教團融合論、國社會總裁田中智學君。教義の統合に就て、僧正井村日成師。統合に關する意見、大僧正本多日生師。五義三法、國社會總務山川智應君。統合近世史實、權大僧正藤田亮淳師。時局と統合、高島平三郎君。基督教徒の統合運動、マスターオゲアーツ柴田一能師。國家と宗教、法學博士山田三真君。日蓮主義より觀たる神學及科學、文學士小林一郎君。現代と道徳、文學士吉田靜致君。國民道徳に就て、文學士深作安文君。日本國民の自覺、海軍少將佐藤藏太郎君。世界政策小史、文學博士箕作元八君。日本佛教史、境野黃洋君。儒教と佛教、文學博士井上哲治郎君。惟神道に就て、法學博士寬克彦君。觀心本尊抄問題、清水梁山師。本尊の統一、僧正嶋村日正師。如說修行抄後、菩薩主義、僧正野日日主師。日蓮本佛論、大僧正阿部日正師。本化行學の指針、權僧正松森靈運師。壽量品大觀、權僧正關田日成師。

販賣所

東京小石川白山前町十七

三

上

義

徹

振替東京二八八四〇番

(東京市神田區美土代町二丁目一番地、三秀舎印行)